

放浪する聖者と汚れた聖女

——金沢の文学風土における人間像——

藤 本 徳 明

はじめに

「金沢は日本のワイマール」であり、「文化の都市対抗でもおこなわれれば、かならず、この日本の古都ワイマールは優勝するだろう」^①と述べたのは、小松伸六であり、「歴史の厚みのある町に育つことは、とりわけて文化の諸分野に属する仕事をする分には、欠くべからざる条件なのであるかもしれない」^②と、金沢に育つた「仕合せ」を記したのは、堀田善衛である。また、金沢を「独自の文化と伝統を持った一つの文化圏」^③と作中の人物に語らせているのは五木寛之であり、「折目正しい四季と、清らかな山河、技巧的な生活の手段」、「そこ（金沢——引用者注）には「すべての緊張が備えられていて、人間を、ひいては文学をゆたかに醸すのである」^④と述べているのは曾野綾子であり、たとえば、金沢の地名は、「地名がそれだけのレアリティーを帯びて、小説全体のレアリティーを形づくっていく上で、きわめて具体的な足がかりになる」^⑤といったかたちで、金沢の特色をとらえているのは古井由吉である。

これらは、かつて金沢に在住したことがあり、現在活躍中の、作家、評論家の、金沢観を、任意にとり出したものに過ぎぬが、こうした指摘によるだけでも、金沢が、独自の、しかも、なかなかすぐ

れた文化伝統にはぐくまれてきた都市であることは、十分証言されていると言つてよい。

文学の世界において、泉鏡花、徳田秋声、室生犀星の、いわゆる三文豪を生みだしたことは、周知の事実だが、他にも、思想や学術の世界にあつても、三宅雪嶺、藤岡作太郎、西田幾多郎、鈴木大拙らの、すぐれた人材を、この市および、その周辺の地は生んでいる。

宗教的にも多くの偉材を輩出しており、美術工芸の伝統は、藩政以来、連綿として栄えつづけてきたし、謡曲、能楽、茶道などの芸道もさかんなこの都市の文化性を疑うことはできない。

しかし、激動する今日という時代にあつて、徒らに、過去の伝統にのみ懐古の眼を注いでいるだけでは、それを、未来に向けて生かさるべき、生産的伝統たらしめることは不可能であろう。

現代にあつて、その「伝統」が、いかなる意味をもち、それが、いかなる可能性を孕んでいるかを問うことこそが、現実生きる市民に課せられた課題であると考えられる。

私は縁あつて金沢に移り住み、市立大学で文学や文化史を講ずる機会をもつた。また、その中で、この土地に関する文学や文化に親しみ、また、それについて発言する機会をも、幾度か持ちえた。^⑥

そうしたことを機縁として、私は、この、すぐれた、また個性ある一都市の文化伝統の特色ともいふべきものを、主として、文学を中心としつつ、自分なりのやり方で、把握し、確認してみたいと企てるに至つた。

さしあたり、ここでは、金沢に何年か在住して、金沢の街の独自性や美しさを広く世に紹介した作家である五木寛之の一つの短編を手がかりにしつつ、金沢の文化伝統の一側面に関しての、粗い素描を試みてみるものである。

最近、風土論や風景論が脚光を浴びつつある時代であるとも思われる。この小文が風土性に即しての、文芸の学としての、文芸風土学の立場からの、一つの試論ともなりうれば幸いである。

- ① 「文学の旅人北陸能登篇Ⅴ」中の「北陸の文学大観」
- ② 「太陽」(昭和43・9)中の「金沢風物誌」
- ③ 「恋歌」中の、金沢の少女垂由美のことば
- ④ 「石川近代文学館開館記念 郷土作家三人展」中の「雪と醜醉」
- ⑤ 「北国新聞」(昭和46・2・14)中の「小説と土地」
- ⑥ 単行本としては

「金沢の文学」中の「近代小説」の項

「加賀能登の文学」中の「近代小説」の項

前掲「文学の旅人北陸能登篇Ⅴ」中の「ふるさとの古典」の項

雑誌掲載のものとしては

「仏教文化」(昭和46・11)中の「北陸の文学風土における女性像」

受難の美女の系譜」

「おあしす」(昭和46・11)中の座談会「金沢は文化都市か」など。

なお、本稿の内容は、これらの文章または発言と関連し、一部重複する点のあることをお断わりしておく。

一 放浪する聖者

五木寛之に「聖者が街へやつてきた」^①という小説がある。北陸路でも、とりわけて保守的な面を多くもつ金沢の街に、全国のヒッピーたちが大挙しておしよせ、金沢はたちまち、ウッドストックのように、いわば、ヒッピーの聖地と化すという、架空ハプニング・テーマの作品である。

金沢は、由来、伝統の町、格式の町とされている。その金沢と、近代文明に対する尖端的反逆者であるヒッピーたちとの組みあわせは、いかにも奇想天外である。しかし、金沢が形成し、触媒した文化エネルギーには、たしかに、ヒッピー的な、というのが言いすぎであれば、形式合理的、ないしは、二項対立的とも言われるべき近代文明に反撻的な要素は潜在していると思われる。その点で、やはり、五木の着眼の鋭さを、認めざるをえないのである。

「聖者が街へやつてきた」というタイトルは、むしろ、アメリカ民謡 'When the Saints marching in' からとられたものである。「聖者」とは、この場合、ヒッピーのことをさしている。彼らのあいことばは「至上の愛への行進」であり、登場するフーテンの少女も「女の子はみんなエンジェル。男の子はみんなセイント」だとも言っている。この発想は、もとより、ローレンス・リプトンの「聖なる野蛮人」^②などとモチーフを共有するものにちがいない。その発想は、「青年は荒野をめざす」とか、「デラシネの旗」^③などという作品の題名が象徴する五木の思想と結びつくし、同時に、金沢という街の性格——すくなくとも、金沢の文化的ポテンシャルのある側面とも、微妙に結びついている点で、なかなか含みの多い題

名だと思われる。

ヒッピーを、私なりに、今日の、日常的体制の秩序にあきたりず、心情のユートピアを求めて放浪する若者たちとでも定義してみたい。^④そうすれば、たとえば、金沢に生まれた文学者自身や、金沢を描いた文学の主人公たちの、きわめて多くが、その定義にあてはまることに驚かされるのである。

前述したように、金沢の生んだ三人の文豪とされているのは、泉鏡花、徳田秋声、室生犀星である。この三人の作風や資質の、強烈な差異は、だれの目にも明らかである。にも拘らず、その金沢における生い立ちにおいては、意外に共通する要素が多いのである。貧しい、また複雑な家庭環境。^⑤非正規な学歴。その結果としての、逃亡同然の、郷里との別離。

そうした彼らは、青春の時事において、現実にも、放浪の旅を続けたが、また、その作品世界のなかでも、おのがじしのユートピアを求めて放浪する若者の姿を、鮮やかに描いた。鏡花の「照葉狂言」の貢がそうであり、「歌行燈」の喜多八がそうである。^⑥「風流線」に至つては、白山麓のアウトロウたちの、ゲリラ的反乱を描くことで、まさに、戦鬪的ヒッピー集団に近いものを造形しえている。秋声の「徼」や「仮装人物」の主人公、「あらくれ」や「縮図」の女主人公たちは、いずれも秩序に背いて放浪する者に他ならぬ。犀星の詩篇はおおむね、白秋名づけるところの「遅い蛮人」^⑦の牧歌と見なせるし、なかんずく、「ふるさは遠きにありて思ふもの」に始まる「小景異情」^⑧の絶唱は、「うらぶれて異土の乞食」^⑨に近いものとなつた作者の「夢の中のみ存在する」「故郷」——

すなわち心情のユートピアへの思慕の歌だと言える。

当の「聖者が街へやつてきた」の作者五木寛之が、外地引揚派にして、「漂流」^⑩の思想者であることは周知のところ。五木のみならず、縁あつて、金沢に身を置いた作家たちやその作品にも多く同じことが共通して言えるのは、ふしぎなほどである。^⑪

かつて金沢に在つた第四高等学校に学んだ中野重治の「歌のわかれ」や、井上靖の「あすなる物語」もまた、青春流離の感懐をうたつた散文詩的作品であるし、四高の後身金沢大学で一時教鞭をとつた新鋭作家古井由吉の、芥川賞受賞作「杏子」をはじめとする一連の作品は、街から山へ、日常から幻想への離脱をテーマとしているといえる。

金沢に育ち、「地上」で世に出た島田清次郎は、大志と現実の相克の果て、放浪を重ねて狂死した。大聖寺出身で、金沢に一時居住したことのある深田久弥は、山を愛し、山に死んだ作家だが、その代表作のひとつ「知と愛」は、主人公で、北陸にゆかりをもつ牧郎少年の、自由を求めての北国路遍歴を描く。金沢出身の母を持つ三島由紀夫の、異常な自決は人々に多大の衝撃を与えたが、その、「美しい星」では、金沢の無頼の「金星人」竹宮の行方は、杏として知れぬままに終る。金沢二中に学んだ堀田善衛の文学的テーマの一つが「逃亡」であることは、すでに指摘もされている。^⑫

金沢に触れた推理小説の世界に目をやれば、松本清張「ゼロの焦点」の鴉原は、日常の秩序に回帰する寸前、金沢を去つて、能登の荒波の中へと消える。大陸引揚後、金沢一中に学んだ生島治郎の「死者だけが血を流す」の牧も、金沢への復讐を試みに東京から流れ

てくるアウトロウである。前二者も含め、陳舜臣「孔雀の道」や笹沢佐保「三〇〇〇キロの罌」も、金沢とその周辺を一部舞台として、この地の人情風土への、アンビヴァレントな意識を契機に、旅する主人公たちと犯罪の関わりを描いていることが注目される。

時代を遡れば、吉川英治「新平家物語」をはじめとする、義経伝説に取材した小説の数々は、貴種流離譚の定型に添いつつ、放浪する貴公子のドラマを、金沢周辺にあえて設定している。¹³ 真継伸彦「鮫」「無明」の連作の主人公たちが、求道の遍歴の末、転機を迎える所として、辻邦生「嵯峨野明月記」で本阿弥光悦が、新たな人間の自覚を得る所として、また山本周五郎「虚空遍歴」の沖也が、芸道追求の果てに敗北を喫する所として、ひとしく金沢の地が選ばれているのは、必ずしも偶然ではあるまい。

人口たかだか三十何万の裏日本の町が、このように多くの小説に扱われること自体いささか異例だが、そこに登場する主人公たちが、ほとんど、秩序から疎外されつつ、「聖なるものへの渴望」「存在への郷愁」¹⁴ にくられて遍歴をつづける、探求の神話の、「若きアダム」¹⁵ としての風貌をそなえていることは、いつそう驚きに値いすることではあるまいか。

わりきつて言うことを許されるならば、金沢を描いた小説に登場する主人公たちの多くは、「放浪する聖者」¹⁶ たちなのである。

むしろ、これには、北陸路が、文化の全国的中心地であつたことがなく、遊行の径路であり、流離の地でありつづけたという歴史的事実にも由来している。記紀における大國主命以来、家持、紫式部、そして「平家物語」、「義経記」、「太平記」に登場する武将

たち、世阿弥、芭蕉、近松と、日本文学史の巨匠たちをも含め、その遊士の系譜は多彩である。

だが、今日では、そのうち、とりわけて、金沢にのみ、作家の描写の焦点が絞られ、そこにおいて、先のような、言つてみれば、「神話的原型」が、形成され、もしくは触媒されて、反復されていることは、依然として注目に値するのである。

① 「別冊文芸春秋」(昭和44・12)△小説集「こがね虫たちの夜」にも所収▽

② 「ビートの最初のガイドブックとして注目された」と「反逆的文学論」(吉村貞司)も述べている。

③ *Déracine* は、フランス語で、「根こぎにされた」という意の形容詞でもあり、「祖国を離れた難民」という意の名詞でもある。

④ たとえば、「現代用語の基礎知識」(昭和45年版)で「ヒッピー」を大宅壮一は「『自然に帰れ』というのが主張で、金を使わずに楽しみ、月並みな社会生活を意識して避ける態度をとっている。時には既成の規格に対して大衆行動もとる」としている。その他、前掲「聖なる野蛮人」(ローレンス・リプトン)や「緑色革命」(C・A・ライク)や「ビート・ジェネレーション」(諏訪優)などに詳しい。

⑤ 「泉鏡花」(村松定孝)、「徳田秋声伝」(野口富士男)、「室生犀星」(新保千代子)などに伝記的事実は詳しい。

⑥ 「泉鏡花論考」(大石修平)が入ふるさとは遠きにありて▽という一章を設けているのは、本章の趣旨からみて示唆的であつた。

⑦ 「愛の詩集」(室生犀星)に寄せられた北原白秋の序文中の言。

⑧ 「抒情小曲集」所収

⑨ 「小景異情」を批評した萩原朔太郎の「室生犀星の詩」△「日本」昭和17・5▽中の言。

⑩ 「風に吹かれて」、「ゴキブリの歌」、「につぼん漂流」などのエッセイ集からも読みとれる。

⑪ 以下の各作品については、前掲「金沢の文学」、「加賀能登の文

学」中の拙稿で解説を試みたものが多い。

⑫ 出世作「広場の孤独」以来、「祖国喪失」、「若き日の詩人たちの肖像」などに、そのモチーフは貫かれている。

⑬ 他に村上元三「源義経」、富田常雄「弁慶」など。義経が、亡命の経路として、北陸路を選んだか否かは、歴史的には分明でないのだが。

⑭ 「聖と俗」(M・エリアーデー―風間敏夫訳)

⑮ 「エデンの探求」(元田脩一)

⑯ アメリカの、ビート・ヒッピー派の作家中の第一人者ともみなされるJ・ケラワックの代表作が「On the Road」(放浪)、「The Diarma Burns」(ダルマの放浪者)。「放浪する聖者」とも訳せる√などであることは、本稿の趣旨からして興味深い。

二 汚れた聖女

ここで、しばらく、眼を別の方に向けてみたい。すなわち、先の男性たちが、「聖者が街へやつてきた」のことはをかりれば、放浪する「セイント」であつたとすれば、当然、対応する「エンジェル」、もしくは「マリア」を役割する女性の存在が予想される。そして、金沢ゆかりの作品群には、はたして、これまた、かなり濃い共通性をもつて、そうした女性たちが、その美しい姿を見せていることに気づかされるのである^①。

例を鏡花にとろう。鏡花が、出世作「義血俠血」の金沢の女水芸人滝の白糸以来、艶に美しく、心やさしくて、俠気に富んだ女性を描きつづけたことは知られている。白糸も、「照葉狂言」の小親も水商売の女だが、「湯島詣」、「婦系図」、「歌行燈」、「白鷺」と、彼の名作のヒロインはすべてと言つていいほど、身は汚れていても、心は聖女のように美しい女たちであつたことも周知のところである。鏡花ばかりではない。秋声も絶筆「縮図」に至るまで、犀

星も、初期作「蒼白き巢窟」から、晩年の「かげろふの日記遺文」に至るまで、苦界に身を落しながら、心やさしい街の女たちを、好んで描きつづけたのであつた。彼女たちを、ひとくちに、「汚れた聖女」^②と呼んでも、はなはだしい過まちを犯すことにはならぬはずである。

それにしても、金沢ゆかりの小説には、この種の、心やさしい売春婦たちが実に多く登場するのである。島田清次郎「地上」の冬子、水上勉「あかね雲」のまつ、生島治郎「死者だけが血を流す」の小枝子、森山啓「市之丞と青葉」の青葉、山本周五郎「虚空遍歴」のおけい、そして、五木寛之「朱鷺の墓」の染乃。彼女らは、いずれも、放浪する恋人に、つくして悔いを知らぬ「聖娼婦」であり、「罪と罰」のソーニャの文学的血縁である。

しかし、彼女たちは、ひたすらやさしいばかりではない。そうした女性像の原型ともなつたともいえる滝の白糸も、年若な愛人のためにはあえて兇刃をふるつたことが象徴するように、彼女らの母性的愛情は、「女は弱し、されど母は強し」のことはそのままに、愛する者のためには、破滅と引きかえにでも、敵ととりくむ雄々しき・荒々しさを、その一方では発揮しもある。

それは、献身が支配となり、敗北がそのまま勝利である、性における女性のメカニズムの反映でもあり、エルンスト・フィッシャーのことばをかりれば、「生の原理」であると共に「致命的な去勢」でもある「始原の母」^③の、神話的イメージの文学的肖像とも見てとれるであろう。

再び、鏡花に例をとれば、白糸も小親も、そのかぎりないやさし

さは、村松定孝の言う「亡母の憧憬」^④の念の現われであると同時に、三島由起夫の言う、「かぎりなくやさしく、同時にかぎりない怖しさに充ちた年上の美女」、「聖女」にして「魔女」にして「美女」^⑤という「永遠の女性」の、それぞれ一つのバリエーションにも他ならぬのもある。この、やさしさと怖しさの複合感情は、「高野聖」や「天守物語」における美しい女怪たちに対するものにおいて、頂点に達する。

ここで加賀金沢の原文化を支配したと思われる白山が、女神を神体とし、中世の神仏習合の教儀によれば、本体は伊邪那美命にして、かつ、十一面観音であるとされていることを暗示的なこととして想起したい。

黄泉の女神伊邪那美も、悲母観音も、ヴィーナスや聖母マリア、エジプトのイシス、インドのカーリ女神などと、おそらく遠い源を一つにする大地母神的神話原型に属するものであることは、神話学や、文化人類学の最近の定説とみてよいであろう。^⑦

鏡花、秋声、犀星の三作家たちは必ずしも多く、金沢の女性を描いたわけではないが、しかしその女性像の造形に、幼少時の、つまり金沢の女性像が深く投影していることは、疑いをいれぬ。^⑧

事実、彼らの描く女たちは、ひとしく、男に身をまかせつつ、しかも、敗北を勝利へと転化するやさしい「悪女」たちであることにおいて、共通しているとも言えるのである。

かつて私は、金沢——北陸の女性像を論じつつ、PassionとSacrificeとどう二つの宗教的用語を援用して解釈したことがある。^⑨そこで述べたことを簡約して言えば、Passion という語は、「情

熱」という意味、「受難」という意味と同時に、キリストの十字架上における「贖罪」と「救世」の行為を意味していること、Sacrifice は「供儀」の意味と共に、語源的には「聖化」の意味をにない持つことは、「『受難』が『情熱』と化し、その『犠牲』が、宗教的、また文学的に、より高い次元の意義を得て『聖化』される素地」を、それらの女性像の中に見出だす、ひとつの手がかりになるのではないか、という意味のことであつた。

こうした憶測を、あかしだててくれる作品は、「高野聖」や「かげろふの日記遺文」など、鏡花、犀星のそれにも多いのだが、金沢ゆかりの、女流作家たちの作中人物たちにも、「聖女」性と「悪女」性の、アンビヴァレントな二面性をにないもつ女たちはなかなか多い。女を描いて最高の傑作のひとつとされる「女坂」の作者円地文子は、夫君に石川県人を持つ人であるが、金沢の陶工の娘萩乃をヒロインとした「雪燃え」には、「雪」の冷めたさ、きびしさをもつ意志と理知と共に、「燃え」る情熱と肉体、献身的愛をも併せ持つ大地母神の女性が、艶麗に描かれている。金沢に少女時代を過ごした曾野綾子の「無名碑」、「弥勒」、「たまゆら」、「雪に埋もれていた物語」や、金沢出身の水声光子の「雪の喪章」、「みだれ扇」などに出てくる金沢の女たちも、男を愛することで、男を亡ぼす、美貌の悪女たちであり、松本清張「ゼロの焦点」の室田夫人、陳舜臣「孔雀の道」のランポール夫人も、媚態の底に殺意を秘めた金沢の女たちであつた。

金沢は妾の町であるという俗説もあり、^⑩金沢の酒場の数の対人口比率は全国一という統計もある。^⑪歴史的にも、加賀百万石が安泰を

保ちえたのは「徳川一門と婚姻をつうじて血縁関係をむすぶことに異常に積極的であった」^⑫ことにもよることは定説である。身をまかせて、心をとりにくす、女のいくさの、技術がみがきぬかれたゆえんでもあるだろう。

ところで、周知の、ジョルジュ・バタイユのことばをひけば「エロチスムとは、死を賭するまでの生の讃歌である」。つまり、性の根底には「自己を超出して、存在の孤独が消滅する抱擁のなかに没入する時に、はじめて飽和感を味わう」^⑬メカニズムが存するのだが、「放浪する聖者」としての男性と、「汚れた聖女」としての女性との、葛藤を通じての存在の根源に肉迫する壮嚴な祭儀としての愛、というのを、金沢にゆかりをもつ文学の、根幹をなす主題の一つである、とすることは、少しく飛躍に過ぎるであろうか。が、そうした見かたが成り立ちうるなら、そこに冒頭の五木の作品で、それを「至上の愛への行進」と呼んだゆえんも理解できるのである。

ふたたび、フィッシャーによれば、母系族のトーマスは「肉」であり、父系族のそれは「夢」で、前者は有機的・継時的、後者は精神的・共時的だ^⑭。「汚れた聖女」たちは、「肉」の交わりを通じて、瞬間を永遠化しようとし、至福を定着させようとするのに対し、「放浪する聖者」たちは、「夢」を追うて旅立ち、母胎に反逆しようとする。だからこそ、「ふるさととは遠きにありて思ふもの」なのだ。

してみれば、金沢を舞台として、我々は、「現実にはない国」である Utopia^⑮を求めて果てしなく放浪する男と、受苦が情熱であり、秘儀であり、身をけがす献身によつて聖化される Passion と

Sacrifice の女との出逢いによる根源的葛藤の神話原型ともいうべきものの反復を見出すことができるのである。^⑯

むろん、それは、先にも言及したように、「古事記」における大國主命と高志沼河比売の神話から、島村と駒子の「雪国」の物語に至るまで、越路は、流離の、ひなの地であつた。それゆえ、「『たたなづくに肌』に触れることは、すなわち『たたなづく青垣』の山を標有^シることである、そんな素朴なコレスボンダンス」^⑰にもとづく「貴種流離」の物語の地としての、舞台設定のなされる宿命に似たものもあつたのだ、とも見なせば、見なされよう。

しかし、少くとも、近代小説におけるその「神話」パターンの、金沢に関する反復頻度の多さは、金沢にはあつて、他の地にはない、独自の文化伝統を、他の理由として、求めさせずにはおかないのである。

① 本章のテーマについては、別の角度から、「北陸の文学風土における女性像——受難の美女の系譜」A「仏教文化」(昭和46・11) Vでふれた。なお、「加能女人系」もこの問題に示唆的な資料である。

② 一茶や鈴木大拙や「無門関」などを博引旁証した宗教的小説として周知の、J・D・サリンジャーの「ズーイ」に、「キリストその人」のこととして、the Fat Lady という語を記している所がある。角川文庫版の解説者武田勝彦は、Fatには「豊饒の」の意があり、Ladyは聖母マリアで、したがつて、「多産の聖処女」とも、これを読み取る、としていることは、本稿の趣旨からみて、興味深い。

③ 「幻想と頹廢」(岩淵達治訳)

④ 「現代文豪名作全集」版「泉鏡花集」解説

⑤ 「日本の文学」版「泉鏡花集」解説

⑥ 「石川県の歴史」(下出積与)

⑦ たとえば「桃太郎の母」(石田英一郎)などによる。

⑧ 前章注⑤の各書を参照されたい。

⑨ 本章注①の文章。

⑩ 本章注⑥の下出氏の書や、「大宅壮一選集」第五巻中「金沢」の項など参照。

⑪ 「北国新聞」(昭和46・5・25)

⑫ 本章注⑥の書。

⑬ 「文学と悪」(山本功訳)中の「エミリー・ブロンテ」

⑭ 本章注③の書。

⑮ Utopia は nowhere の意で、トマス・モアの造語。

⑯ 「現代批評の構造」中でフィードラーが「闇の闇——ポーとゴシック小説の発達」(野中克彦訳)と題して述べている文章中の次の一節は、「放浪する聖者」と「汚れた聖女」の出会いの機微を示唆するものとして興味深い。「エゴの代弁者たる詩人は、無意識の代表者、すなわちディオニソスの巫子たる野獣のメイナードに破壊させられ、その破壊の瞬間に神となり、ディオニソス自身と一体となる。」「彼は悩み軽蔑されねばならないが正にその悩みと軽蔑ゆえに彼は愛され、神格化さえされるのである。」

⑰ 「海」(昭和45・9)「放浪への衝動」特集)中「日本人の旅意識」(松田修)

三 金沢の文化伝統

まず確認しておくべきは、「放浪する聖者」たちも、「汚れた聖女」たちも、伝統の街金沢の重い秩序にとつては、結局は疎外者でしかありえないということである。

にもかかわらず、そうした類型が、たえず、そこを母胎として、虚構の世界においてもせよ、削りつづけられてきたこともまた、問題とさるべき事実なのである。

反撥は、何らかの共通条件の存在を前提とする。否定的な私たちにもせよ、そういうものを、形成し、触発したなものか、とそれ

を呼んでもよいだろうか。

T・W・アドルノの「ウィーン」^①は、主に音楽を中心として、ヨーロッパの古都ウィーンの文化における伝統と前衛の接点を浮かびあがらせたエッセイであるが、そのうちの、たとえば、次のような文言は、金沢という街の雰囲気を知る者にも、なかなか暗示的であるように思われるのだ。

アドルノは言う。「自足しきつたウィーンのおだやかな温雅さは、物質的生産の酷薄な要求をやわらげ、そのことによつて、活動し自己形成する余裕を精神に与えた。しかしこの温雅さは精神さえも染めていた。だからこそ、いやしくも精神ともあろうものならば」「この温雅さに反逆し、自己自身の前提から身を守らねばならなかつたのだ」……

こうした発言を念頭におきつつ、北陸の古都金沢の、文化と風土の条件を、しばらく、探つてみたいのである。

まず、その風土的条件だが、たとえば、奥野健男が、北陸全体を「山が海に峻しく迫つたところが多く、概して平地に乏しく、気候も晴れの日が少く陰鬱で湿つばい。そのせいもあるが北陸人は暗く内向的であり、保守的であり頑固なところがある。開放的な明るさ、進取性に欠けている」^②としているのは、そのまま、金沢にあってはめて、くいちがう所が少ない。気まぐれな天候、一年の半ば近くを雪に降りこめられるこの土地が、実践的活動の舞台として不向きであることは確かである。「人国記」がすでに、「加賀国の風俗、上下ともに爪を隠して陰に身を持つ」「自国を全ふして出ることを好まず」としており、俗諺にも、「越中強盗、加賀乞食、越前詐

欺」^③とあるのは、北陸路の中でも、とりわけ、加賀金沢の人情の退嬰性、保守性を示しているものと言えよう。そうした風土では、能動でなく受容が、抵抗でなく頼晦が、文化の表現方式となるであろう。

加うるに、その政治的传统においても、加賀百万石は、それが巨大であつただけそれだけ、幕府からの挑撓を回避すべく、精魂を傾け続けねばならなかつた。三代利常が鼻毛を伸ばして、痴呆を装い、五代綱紀が、新井白石をして「加賀は天下の書府なり」と讃嘆せしめた図書収集や、「百工比照」と名づけられる多彩な美術工芸品の大コレクションを行なうなどの徹底した文治政策に出たこと的背后にも、「戦後の日本に似」^④た、政治的苦慮のあつたことは明らかである。

それゆえ、この地にあつて、変革を実践しようとした大槻伝蔵や銭屋五兵衛は、共に惨劇の末路に陥る外なかつた。明治維新の大激動期にすら、「眠れる大国」^⑤として、歴史のドラマの龔棧敷におかれたままであつたと言つてよい。まれに、永井柳太郎や辻政信のようなスター的政客が出て、その政治的末路は決して華やかなものではありえなかつた。行動でなく、隠忍が嘉みされる政治的風土は、今日も、革新勢力の不毛を現象しつづけていると考えられる。

とすれば、実世界での活動を封じられた精神的潜在力は、想世界に回路を求める他ない。ある者は、「ふるさととは遠きにありて思ふもの」と、夢を追うて旅立つ「放浪する聖者」となり、ある者は、日常の中に夢を受肉させて定着する「汚れた聖女」となるゆえんであろう。

金沢が、美術工芸の伝統の街であり、謡曲、茶道、花道などの芸道の街であることも、前述の、風土的、政治的传统とおそらく密接に関わる。この金沢の特性については、金沢の血をひく三島由起夫が、その、よつてきたるところを、異色作「美しい星」の中で、鋭く指摘している。すなわち、謡曲の「装飾過剰の綴織の文体は、北国では、暗い冬の室内との対照において、華やかすぎる九谷焼や高蒔絵と同様に、暗い鬱屈した感受性との平衡を保つものになるのだ」とする。それは、三島自身の美学の秘密を垣間見せることばでもあるが、同時に、根源への志向に根ざし、暗部を装飾して、日常を祭式化せんとする、金沢の、文学的・美的衝動の原質の、見事な解題であることも確かだ。そして、この金沢の美的志向は、前記の「放浪する聖者」、「汚れた聖女」たちの、情念の志向と陰蔽に相通していることも認めらるべきであらう。

さらに、加賀金沢は、何よりもまず信心の地であると言える。北陸の県民性と浄土真宗との関わりの深さについては、司馬遼太郎、宮城音弥や、祖父江孝男も、それぞれの立場から指摘しているが、本願寺の強力な地盤であると同時に、創価学会の戸田城聖や、爾光尊などにも見られるように、新興宗教の温床でもあるふしぎさだ。北国路は、由来、聖たちの流竄の地でもあつた。親鸞は越後に、日蓮は佐渡に流され、道元は永平寺に、蓮如は吉崎に、亡命同様に移住した。

そのことが逆に、北陸の土壤に在地の白山信仰その他の民俗信仰と結合した宗教的種子を胚胎させたのであり、とりわけ、十五世紀から、十六世紀にかけて、一世紀にわたる、一向一揆による、土民

の自治領形成、「百姓の持ちたる国」の創成という、日本史上にま
れな状況をかもし出したのであった。

金沢大学の井上鋭夫教授の説くところによれば、中世北陸の真宗
教団の門末には、「舟運・海運・漁業」の従事者、「狩猟民・杣工
・木地師・紺掻・金堀り・鋳物師・鍛冶師」など「渡り・太子」な
どとして、「卑賤視」された渡り者たちが多く含まれていた。^⑩して
みれば、加賀周辺における一向宗信仰の核となつた者は、いわば、中
世の「放浪する聖者」たちであつたとも見なされるのである。一
向一揆を、文学の立場から追求しつづけている作家真継伸彦は、一
方、加賀の農民性を描いて、次のように述べる。「彼等は他国を攻
めるには弱い。しかし安住の地を守るためには死力をつくして闘う
のである」。「貧しい北国の土民は朴訥である。彼等は一度えた信
心を墨守する。」「天地が雪に閉ざされるながい冬、在所の衆は始
終寄りおうて談合する。そこでしだいに気高い、正しい信心を養育
することができるのである。」^⑪……ここには、いわば、前者の、
放浪し、探求する「遊行」^⑫的エネルギーと、対蹠的な「受難」を「
聖化」する「定住」^⑬的エネルギーの接触による、最も巨大な精神現
象の連鎖反応の秘密を解く鍵が暗示されているようにも思われる。

私なりの言い方に読みかえれば、「放浪する聖者」のパターン
と、「汚れた聖女」のパターンとが、「性」や「美」においてのみ
でなく、「政治」や「宗教」^⑭においても、それら異質のエネルギー
を累乗させて、核爆発的止揚をなしうる可能性は、中世金沢の史実
のなかに、暗示されていたのではないか、とも思っているのである。

しかしながら、巧妙をきわめた前田家の、鎮圧、懐柔政策によつ

て、——そしておそらくは、浄土真宗の思想そのものの「内面深
化」^⑮性とも言うべきものに由来もして、この、一揆的エネルギー
は、爾後、政治的方向への奔出を断たれてはいる。しかし、なお、
宗教的、文化的には、重い潜勢力をなして、伏流しつづけているこ
とは、先述してきた、様々の文化史的事実自体があかしたててい
る。

唐突なようだが、私は、「放浪する聖者」に土堀の町を寒行する
禅の雲水のイメージを二重映しする。そして、悲哀、忍従、憧憬
といった「浄土教的感情様式」^⑯の中で、苦難の日常を聖化する女の
姿、すなわち「汚れた聖女」の姿に、弥陀への信によつて苦の娑婆
を寂光土と観想する妙好人——というより、妙好女のありようを連
想する。両者とも、金沢の宗教的土壌の中で、脈々と生きつづけた
人間類型であることはたしかだ。

二つの対蹠的信仰は、極限的形態において、異形の疎外者として
の、ヒッピーの様相を帯びていることは否まれまい。

事実、明治に入り、禅の雲水と、真宗の妙好人を一身に具現し、
なおかつ、現代アメリカの、ヒッピーたち、ビート・ジェネレーシ
ョンの詩人たちに、ただならぬ影響を与えている宗教的巨人を、金
沢は、世界に送り出している。言うまでもなく、鈴木大拙である。^⑰

大拙と同郷の心友西田幾多郎もまた、禅と浄土の接点に立つ思想
家であつた。二人とも若い日には、官学エリート・コースからの一
種の脱落者^⑱であり、放浪体験の持主であつたことも注意されてよ
い。大拙の「即非」^⑲の論理、幾多郎の「場所」^⑳の論理も共に、心情
のユートピアを探求しつつ、日常の人生と存在の根源の相関する機軸

を模倣しつづけたもので、前述の、ヒッピー的論理、もしくは、文学にあらわれた金沢の男や女たちの情念の「論理」と近いところにあることは偶然ではあるまい。

大拙が、「日本の霊性」の中で、「北国」の「大地」性を強調し、親鸞・道元・日蓮らの思想に及ぼした、北地辺土への流竄体験の意味の深さを力説したことも、北国金沢の思想風土を考える上で示唆的である。

親鸞が「自然法爾」^②を説き、道元が「生死即涅槃」^③と言い、日蓮が「娑婆即寂光土」^④と称えたのは、いずれも、大乘仏教の究竟地としての、「煩惱即菩提」の境地の変奏曲に、他ならぬのであるが、ユートピアを求めての、苦闘の流竄の果てに、日常の聖化にたどりついた点で、まさしく、これまで探ってきた金沢の思想風土を予兆するものであった。

「放浪する聖者」と「汚れた聖女」のアンドロギュヌスの形態とも言えは言える「聖なる野蛮人」の脈が、北国金沢には、絶えることなくつづいていたことは、この際認められてよいであろう。

「放浪する聖者」と「汚れた聖女」のパターンが、金沢の、風土的、政治的、美的、宗教的諸条件の中で、いわば、疎外されつつ、同時に、疎外というかたちで外在化されてきた^⑤、という文化伝統の二面性を、この辺で、我々は確認してもよいのではなからうか。

① 川村二郎の訳による。

② 「現代文学風土記」

③ 「サンデー毎日」(昭和46・6・6)によれば、現在の犯罪統計で

も、三県における発生率の、それぞれ第一位はこのことわざ通りだといふ。(ただし、「乞食」は「空巢ねらい」に読みかえる)

④⑤⑥ 「歴史を紀行する」(司馬遼太郎)中の「加賀百万石の長いねむり」

⑦ 「日本人の性格」

⑧ 「県民性」

⑨ 「実悟記拾遺」

⑩ 「一向一揆の研究」

⑪ 「無明」△「文芸」(昭和44・3)▽

⑫ 「遊行」、「定住」の概念は、「悪場所の発想」(広末保)中の「遊行的なるもの」に拠った。

⑬ 「文化と行動」(今日の社会心理学)中「芸術行動」(品川清治)で、「武士は犯罪アウトサイダーより出発している。また鎌倉仏教も平安時代の宗教的アウトサイダーより出ている。中世芸能は、美的アウトサイダーと性的アウトサイダーから発生した」とあるのは、本章の趣旨からみて、興味深い。

⑭ 本章注④の書。

⑮ 「美と宗教の発見」(梅原猛)中の「浄土教的感情様式について」

⑯ たとえば「日本の思想家」中の「鈴木大拙」(玉城康四郎)や、「鈴木禅学と西田哲学」(秋月竜珉)

⑰ 第一章注④の「聖なる野蛮人」や「ビートジェネレーション」などにその指摘がある。

⑱ 山田宗睦「親鸞と京都学派」△「思想の科学」(昭42・12)▽など。

⑲ 本章注⑯の各論文や、その他の伝記研究書に詳しい。

⑳ 「日本の霊性」など。

㉑ 「場所的論理と宗教的世界観」など。

㉒ 「末燈鈔」

㉓ 「正法眼蔵」生死

㉔ 「守護国家論」

㉕ 「思想」(昭和37・10)中「人間疎外論の成立過程」(古田光)などに、ヘーゲルにおける「疎外」の概念が、「外在化」「対象化」を含蓄することを指摘していることを、参考にした。

むすび

かつて私は、金沢にゆかりをもつ文学者を中心として、近代文学のあゆみをたどりつつ、次のような結論をしるした。^①「こうして顧みるとき、金沢が形成し、触媒した文学エネルギーが、なかなか豊饒なことに驚かされるのだが、それも、主として、反秩序的・ディオニソスのな美意識の傾向の強いものが多いことは偶然ではなさそうである。『公害』に象徴されるような、形式合理性の秩序の一種の破産状況の中で、金沢の文学風土に潜む、ディオニソスの・マニエリスムのエネルギーが、^②明日に向けて、再認識され、新たな開花を示すことが望まれるのである。……」

こうした論点に、大筋として誤まりはない、と私は考えている。「近代」の文化的閉塞状況への打開が、人類文明の中心的課題となりつつある昨今、ともすれば、「前近代」的と見られがちな金沢が、その文化風土の中で、いわば「超近代」的とも言える、美意識や思想を生産し、あるいは触媒し形成しつづけたことは、文化的にも文芸風土的にも、深甚な興味を払わせずにはおかぬ現象である。

「放浪する聖者」と「汚れた聖女」という二つのパターンを仮説することによつて描いてきた私の、金沢の文化伝統に関する素描も、いわば、「前近代」の深層から、「超近代」の胚芽をさぐる模索の試みのひとつとしてなされたものでもあった。

しかし、このパターンは、野蠻の中の聖性の再認識や、放浪による始源への回帰、性の深淵における人間の深層への遡行といった、フレイザーからエリアーデに至る神話人類学や、フロイトからユン

グ、ライヒらの精神分析、バシュエールやブランシヨラのヌーヴェル・クリティク等々が、まさに問題としつつある今日のテーマに深く関わるがゆえに、さらに追求すべき、多くの要素を孕んでいることは明らかである。

金沢の「スコーレ」都市としての未来像を論じた論文や、^⑩「環日本海圏」の平和的再開発を問う著書も世に出ている。表日本的な一重工業を中心とした国民総生産優先の発想が、手痛い清算を促されつつある今日にあつて、裏日本の、特色ある古都の文化伝統を再検討することは、「文学」の地平を超えた多元的意味を持ちうる作業であることは、ほぼ確かなことである。

ただし、時間と能力の制約のために、本稿は粗いエスキスにとどまつたが、本稿で確認できた問題点は、今後、折をえて、個々に深め、また広げてゆきたいと考えている次第である。^⑪

- ① 「金沢の文学」中の「近代小説のあゆみ——金沢ゆかりの作家を中心として」
- ② 「悲劇の誕生」(ニイチエ)、「文学におけるマニエリスム」(G・ルネ・ホッケ)などによる。なお、攔筆後、「三島由紀夫の神話」と題して、金沢ゆかりの作家三島の生と作品を、ディオニソス神話の具現として考察する酒井角三郎の所論に接した。能楽——泉鏡花——三島由紀夫という、金沢ゆかりのディオニソスの文芸の系譜を考える上で、はなはだ、示唆的な発想であると思われる。
- ③ 「金枝篇」ほか。
- ④ 「大地・農耕・女性」、「永遠回帰の神話」、「イメージとシンボル」、「聖と俗」、「生と再生」ほか。
- ⑤ 「幻想の未来」、「文化の不安」ほか。
- ⑥ 「現代人のたましい」、「こころの構造」ほか。
- ⑦ 「性と文化の革命」ほか。

- ⑧ 「火の精神分析」、 「空間の詩学」ほか。
- ⑨ 「文学空間」、 「来るべき書物」ほか。
- ⑩ 「メガロポリスの崩壊」(佐々木隆文) 、「中央公論」昭和46・2 V
- ⑪ 「あすの日本海」(新潟日報編)
- ⑫ 引用した書物以外にも、「風土」(和辻哲郎)、「日本文学と風土」(長谷章久)、「伝統と現代」(篠田一士編)、「未開と文明」(山口昌男編)などを、全体として参考にさせて頂いた。なお、本稿でとり上げた二つの人間像のパターンは、金沢の文学においてのみならず、日本の文学や、世界の文学の視野においても、ひろく検証されるべきものと推測されるが、その作業もまた、別の機会を待つほかない。

(一九七一年・一一・三〇)